

2024. 12. 15 (日) 使徒20:33~38

20:33 私は、人の金銀や衣服を食ったことはありません。

20:34 あなたがた自身が知っているとおりに、私の両手は、自分の必要のためにも、ともにいる人たちのためにも働いてきました。

20:35 このように労苦して、弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを、覚えているべきだということを、私はあらゆることを通してあなたがたに示してきたのです。」

20:36 こう言ってから、パウロは皆とともに、ひざまずいて祈った。

20:37 皆は声をあげて泣き、パウロの首を抱いて何度も口づけした。

20:38 「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう」と言った彼のことに、特に心を痛めたのである。それから、彼らはパウロを船まで見送った。

<説教>

第3回伝道旅行の終盤、パウロがミレトスにエペソの教会の長老たちを呼び寄せて語ったお別れの説教の最後です。パウロは彼らに、彼らを教会の監督としてお立てになった聖霊から受けた任務があることを知らせました。彼らも主イエスから与えられた任務を全うすべく、「自分自身と教会の全体に気を配りなさい」と勧め(28)ました。パウロがその地を去った後、教会の外から内から悪い者が現れ、教会を荒し、攻撃することもパウロは知っていたのでエペソでのパウロの3年間の働きを「思い起こしなさい。目を覚ましていなさい」と勧めました(29-31)。そしてパウロは改めて、いっそう彼らを〈神とその恵みのみことばにゆだね〉ました(32)。神のみことばが〈御霊の剣〉(エペソ 6:17)、即ち教会を荒らす者、曲がったことを語る者、悪魔の攻撃に対する戦いの武器です。神のみことばが教会を、また一人ひとりを〈かしらであるキリストに向かって成長〉(エペソ 4:13)させ、〈キリストの満ち満ちた身丈にまで〉(同 4:15)成長させ、〈聖なるものとされたすべての人々とともに、…御国を受け継がせることができるのです〉(使徒 20:32)。

そして最後の最後にパウロは改めて、〈神とその恵みのみことば〉によって成長する中で行って来た自分自身の働きに、そして成長させてくださる〈主イエスご自身〉のみことばに目を向けさせます(33-35)。

パウロはかつてコリントでプリスキラ夫妻と共に天幕作りをして働いていたことがありました(18:1-5)。そして今回は、エペソで〈彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを、持って行って病人たちに当てると、病気が去り、悪霊も出て行くほど〉でした(19:12)が、〈前掛け〉はまさに天幕作りのときに身につけるものでした。エペソで書いた「コリント人への手紙第一」の中で「今この時に至るまで…労して自分の手で働いています」と言っています(1コリント 4:12)。パウロがこのとき、エペソでも天幕作りの仕事をして働いていたことが分かります。それは〈自分の必要のため〉だけでなく、〈ともにいる人たちのため〉でした(34)。〈ともにいる人たち〉とはパウロの同行者たちのことか、またはエペソの教会に連なる人たちか、分かりませんが、彼らを〈弱い者(たち)〉(35)とパウロは言います。パウロの同行者たちでもパウロのように「手に職」をつけていなかったのかもしれない。そして普通に、〈弱い者〉とは衣食住に事欠いている人たち、病気の人

たち、更には信仰の故に迫害され囚われている人たち等のことが考えられます。エペソの教会に、そういう人たちがいたのでしょうか。彼らを助ける必要のためにもパウロは〈労苦して〉働きました。確かにそれは「人の金銀や衣服を貪る」こととは正反対のことでした。

「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい」(エペソ 4:28)、また「…貪る者は偶像礼拝者であって、こういう者はだれも、キリストと神との御国を受け継ぐことができません」(エペソ 5:5)とパウロは後にエペソの教会に言うことになりました。

そのように、〈労苦して(働き)、弱い者を助けなければならない) こと、これもパウロの独創ではなく、主イエスのみこころ、みことばによる教えであることをパウロは示します。「受けるよりも与えるほうが幸いである」という文字通り直接のみことばは聖書には記されていません。しかし、福音書には確かに「与える」ことを大事なこととして命じる主イエスの教え、みことばが記されています。十二弟子たちに「行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。」とお命じになったのに続けて「…あなたがたはただで受けたのですから、ただで与えなさい。」と言われました(マタイ 10:7-8)。また「与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。」とも言われました(ルカ 6:38)。そして先にパウロは「みことばは…あなたがたに御国を受け継がせることができる」と言いましたが、みことばに従って「弱い者に与えて助ける」ことがどれほど主のみこころにかなうことであり、御国を受け継がせていただくことと密接に関係しているかということが主イエスのみことば、教えからわかります。マタイ 25 章に、最後の審判の場面が記されています。イエスの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人が「空腹だったときに食べ物を与え、渇いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに尋ねてくれた」人たちに対して、イエスが「それはわたしにしたこと」と認めてくださり、「御国を受け継ぎなさい」と言ってくださるというのです(マタイ 25:31-40)。そういうわけで、〈労苦して、弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを、私たちも覚え(思い起こし)ているべきなのです。

ただ、このように「与える」ことを「救いの条件」とか「自分の功德、功績、手柄、自慢」としてはなりません。「あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深くなりなさい」(ルカ 6:36)と主イエスは言われました。私たちが労苦して弱い者に与え、助けるべきなのは、自分がまず弱い者として神からあわれみを受けた者だからです。罪の故に全く弱い私たち、滅びるべき者を神があわれみ、ひとり子イエス・キリストを救い主として与えてくださいました。罪深く弱い私たちのために、イエスは十字架で死なれて、身代わりに罪の刑罰を受けてくださいました。そしてよみがえられました。そのイエスを信じる者に神は永遠のいのちを与え、滅びから救ってくださいます。そのように、主イエスを信じる者は、まず神からあわれみ、恵み、救いを受けました。この主イエスにある救い、神の愛、恵み、あわれみを私たちは受けることしかできません。それを「受ける」ことこそ大事であり、「受ける」ことが幸いなのです。だからまず「受ける」ことを拒んではなりません。そのように神のあわれみ、愛を受た人は、霊的にも、物質的にも受ける良いものはすべてイエス・キリストにある神からの賜物だと知るので、だから神に感謝して、神の愛を証しするのです。使徒ヨハネは言います。「キリストは私たちのために、

ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべきです。この世の財を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょうか。子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」(Iヨハネ 3:16-18)と。

私たちが人に与えることは、弱い私たちが神からあわれみを受け続け、愛を受け続けていること、弱い私たちに神の愛がとどまっていることの証しです。主イエスが今も生きて働き続け、弱い私たちに聖霊を与え続け、永遠のいのちを与え続けてくださっていることの証しです。そして、人に与えるべき物も、その物を手に入れる能力も何もかもすべてを神から受けていることの証しです。こうして、人に与える私たち自身と、受ける人ともに神の栄光が現されるのです。だから受けることも幸いですが、与えることにはもっと大きな幸いがあるのです。そう主イエスご自身が保証してくださっているのです。